
仮面ライダー 幻想郷～原点の風が幻想入り

本郷一刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー 幻想郷 原点の風が幻想入り

【Nコード】

N5414X

【作者名】

本郷一刀

【あらすじ】

かつて、世界の裏を操作していた秘密結社『ショッカー』を壊滅させた

4人の改造人間たち、そのショッカーの恐怖が『幻』となった今、若きライダーの闘いが再び・・・

第巻話『再び駆け抜ける風』

少し前まで、「シヨツカー」という組織と戦っていた戦士たち中で、プロトタイプ唯一試作品の戦士がいた。その戦士は、他の3人の戦士とは別の道に進み、学生として暮らしている。しかし、そんな平和は、長くは続かない。平和にするまでは時間がかかるが、平和を壊すのは一瞬だ、その一瞬を彼はのんびりと過ごしたかっただけだった。それは人々の心からシヨツカーの恐怖が「幻」になっていた時のことだ。

― やつと落ち着ける生活を送れるようになった、風見さんや本郷さんは教師として一般人の中に紛れ、一文字さんは各地に飛んでカメラマンとして活躍しているなか俺はただの学生として紛れ込んでいるが、落ち着かない。また何か起りそうな気がして仕方ない。

「北郷君、おはよ〜」

「ああ、おはよう」

とそっけなく返事してしまう。自分が嫌だが、あの日以来あんまり人とかかわりたくない、俺はもう、ホッパ―プロトタイプ01として改造されてしまったあの日からだ、
まったく俺は、あの人たちには追いつけない。

「ねえ・・・少し遊ばない？」

「へ？」

不意に背後から声をかけられ、振り向くが誰もいない。空耳かと思

い振り返ると、美しい女性が、目玉がたくさんある空間から上半身を出していたが周りは気付かない。というよりも周りの人がいないそして、俺までその目玉だけの空間に吸い込まれていた。

「ここはどこだ！ ショッカーの一員か！」

「いいえ、違うわ、むしろその逆、あなたの力が借りたいの」

「……力を……どういう事だ」

「貴方達が戦っていた敵がちょっとこっちに来ちゃって残虐を始めてね、私達でも手に負えないの」

その言葉で脳裏をよぎったのは、目の前で殺された家族の姿だった、そして同じ思いをしてる人がいると考えると怒りがこみ上げてきて、顔の傷が少し浮かび上がっていたらしく、相手は少し表情を変えていた。

「分かった、だが相棒も連れ^{バイク}ってけよ」

「解ってる」

意志の決定は思いのほかあっさりとしていた自分に驚きを隠せないでいる。だけど、迷いが無い方が幸せかもしれない。脳改造をショッカーの面白半分でされなかった俺にとってはただけど……

第式話『闘いは再び』

俺が目的地に着くとそこには、シードラゴンが人を殺そうとしていた。しかし、すでに何人が殺したらしくシードラゴンに血が付いていた。赤く鮮やかな血と黒く染まった血が、

そして、シードラゴンは転んだ子供を絞め殺そうと近づいてくる。子供は恐怖でその場で泣き始め逃げようにも足がすくんだらしく動けない。そこに蒼い服を着た女性が子供を抱きかかえるが、シードラゴンはすでにその背後にいて手の触手を伸ばそうとしていた。

「はああああ！！！」

「ぐ・・・貴様はホッパー01！」

「久しぶりだな、ショッカーの怪人、さあ君はその頃連れて早く」

「ああ、どこのだれか知らないが助かった。」

「礼はいらないよ・・・さあ残りの2体も出てこいよ」

女性が遠くに行ったのを確認し、シードラゴンの残り2体を見つけ出す。

そして、徐々に俺の体が装甲で覆われ、ヘルメットの様に仮面を付け戦闘準備は終わり相手に向かって走る。

.....

あれ？あの人かず君？でも雰囲気違うけど、かず君だ、
なんで幻想郷に？って変身した！？あれって確か仮面ライダー旧1
号？

ベルトも白いし、目も白いし、身体は黒いし、赤いマフラーだし、
あつ混乱してきたけどとりあえず避難誘導しないと！

.....

シードラゴン1の頭をつかみ、支点として使い身体を宙にあげてそ
のまま相手の頭を砕き、その体をシードラゴン2にぶつけて、飛び
上がり相手にライダーパンチを浴びせる

「ライダーパンチ、二段返し」

シードラゴン1、2を破壊した北郷ライダーはそのまま逃げようと
する、シードラゴン3を捕まえ情報を聞こうとサイクロンで轢き飛
ばし捕まえる

「さあ貴様のボスはどこにいる？」

「俺たちは、そんなことを貴様などに言うものか！」

「言いやがれ！」

「ふん、ヒントをやるう、怪人は俺たちを含め、10体だ、10体
だけでもここは征服できる！！」

と言に残したあと相手は爆発した。ショッカーは証拠を残さないた
めに怪人たちを爆破し、強い酸で溶かす。用済みの処分に關しては
徹底している。

「消えたか、あと7体の怪人が、スパイダー、バット、コブラ、スネーク後の3体は誰なんだ？」

と疑問を残しながらも変身した姿からいつもの姿になり、あたりを見回すがシヨツカー戦闘員の姿すらなく、怪人単独の行動とみていいらしい。ただ久々の戦いのせいで、リジエクシヨン（定期的に血液を交換しないと起こる拒絶反応）のような現象に見舞われる。

「具合はあまり良くないみたいね」

「半年のブランクがあるからね……でも心配されるほどでもないから大丈夫だよ……え……と名前は？」

「八雲紫よ貴方は北郷一刀、またの名をホッパープロトタイプ」

「いや今は仮面ライダーとして都市伝説になってるよ」

「でどう？相手の人数は解った？」

「ああ、とりあえず後7体の怪人がいるってことだけ」

その後一刀は被害の確認をしに行った。死者13人、負傷者30人と少ないような気がするが、この里にとっては大きい被害である。

「あのさあ、八雲さん俺の家はどこになるんですか？」

「あつそれならいいところがあるわ！」

と言われ、サイクロンごと「スキマ」と呼ばれる物を通り、目的地に着いたが何時もスキマにはあんなにも目玉があるのだろうか？気

にしちゃいけない所かもね。

「到着」

「ここどこ？」

「貴方の知り合いがいる所なはずよ」

「知り合いってかもうこんなに日が暮れて帰り大丈夫ですか？」

「心配してくれてうれしいけど大丈夫よ、きちんと先に連絡したら大丈夫だからはいりなさい。」

「了解、ふう、失礼します」

「はい」

「どうも八雲さんからここでお世話になれと……ってさなちゃん！？」

「かずくん！？」

「おや、一刀じゃないか」

「神奈子さん！？」

と意外にも昔仲良くしていた親子？（一刀支点）がそこにいた。そして見たかった微笑みが見れたことで今まで感じなかった物を久々に感じた。がそれと同時にまた戦いの渦にみを通すこととなる意味でもある。

第参話『再会、幼馴染そして新たなる闘い』

束の間の平和というほどでもないが、個人的に満足している。がしかし、何で思い出話

しかも恥ずかしいのばつか話すんですか！？

「いやゝ早苗が五歳のころ二人で、迷子になった時、私を見つけて早苗は大泣きして、一刀はそのまま、早苗を泣かないようにしてくれたっけ」

「それは昔のことです」

「そうですよ……」

「でも中学のバレンタインの時なんかさあ、他の女から一刀を守ってねえ、自分の部屋に逃げ込んだときはちょっとひやひやしたけどね」

「あれは俺も驚きましたしちょっと……」

「「ちょっとって何かな？」」

しまった！墓穴掘った！？さすがに神様に嘘言つのもまずいし、どうしたらってかさなちゃん頭からめっちゃ煙出てるよ！？俺でもそんなことできないのに

「葛藤してるねゝ相変わらずでよかったけどね」

「はい？」

「諏訪子悪いけど今ショート中な早苗を早苗の部屋に連れてって」

「はいよ」

さなちゃんを連れて諏訪子さんはこの部屋を出て行った。そして神奈子の顔はさっきまでの笑顔とはちがい真剣な表情になりこちらを見るそれに合わせて俺も真剣な顔にする

「でいつからそうなっちまったんだい？」

「貴女達が行方不明になった日の次の日に貴女方を探しに神社のあった場所から帰る途中でした。シヨッカーに捕まり、その後このような体にされ、あいつ等の気まぐれで、脳改造はされずに済んで、1号と共に脱出しました、その後は1号を抹殺しに来た2号、V3と共にシヨッカーの怪人軍団を壊滅させました。がまさか、こんな事になっているなんて」

「ここは幻となったものが来る場所、それ故に善悪は問わないからね、ただ今回に関しては紫にも手が負えない状況になっちゃっただけさ」

「それで俺をここに・・・っ!？」

激しい痛みと共に吐血するような感覚が俺を襲った。今までに無いほどの辛さ、どうしてだ？なぜここに来てからこれが起こる！・・・
・・・はっ!？シードラゴンは囀か!？

あいつらに俺達ホッパーだけに作用する毒を仕込んでおいたのか!？

「大丈夫かい？」

「ええ、あいつら俺たちの誰かが来ることは予想してたらしいです、毒を盛られました、すみません」

「毒！？知り合いになんでも医者がいるから、紹介するよ」

「いえ大丈夫です。並みの人間じゃないですし、これは俺達ホッパ―殺害用の毒だと思います、それにさなちゃんには内緒にしてください。」

「ああ、早苗の事だ、お前を絶対に戦わせないだろう。」

「ええそれと、早速敵が来たようです。」

「え？」

改造された俺には分かるこの音は・・・バイクしかもこのタイプだと、シヨッカーライダー軍団、数は4機、やれる！

「神奈子さんは、隠れてください。俺がやります！」

「いやここは私も出るよ」

「ならこの防衛をおねがいします。俺の帰る家でもあるので」

と言うと顔の手術跡が浮き上がっていたのを見ていないのに気付きそのまま、俺は変身し外で、シヨッカーライダーとの戦闘に映った。

.....

・・・・・・

「ホッパーP1を確認、コレヨリ、殲滅スル、行くぞ」

「・・・・・・」

無言のままショッカーライダーたちは目の前の仮面ライダーにミサイルダーツを投げるが、すべて蹴り返されるまるで、ここを守ると言ってるかのような行動だった。

そして爆炎の中から現れるライダーに向かってくるショッカーライダー達・・・・

第参話『再会、幼馴染そして新たなる闘い』（後書き）

次回、ショッカーライダーとの戦いを始めるライダーは連携攻撃に苦しむが、そこを助けたのは！？

第四話『弾幕炸裂！仕留めるライダーキック！』

目の前のライダーたちは4体・・・いや4人だな、敵の装備はダ
ーツ爆弾か、だが確かこいつらは6人1チームだ。一体何処に隠れ
ていると俺が思っていることやつらの後方から出てきた、そいつらの
口が開き炎を出してきた。

「・・・・・・・・丸焼きかよ、ごめんだね」

というと相手の中に飛び込み両脇の2体に受け身を取りながら蹴り
を決めて怯ませ、その後正面の4体に向かって走り相手の腕を後ろ
に捻じ曲げ動きを封じたその直後、そのシヨッカーライダーもろと
も俺に爆弾を投げてきたが俺はかろうじて回避に成功したもののシ
ヨッカーライダーは見事に爆散した。

「お前ら昔からそうだな。脳改造されなくて良かったぜ」

「まだ間に合うぞホッパーP1」

「お前は結構喋れるようだな」

御互いパンチで相手を殴ろうとするが拳同士がぶつかる、プロトタ
イプの俺は2、8tしかないが相手は3tだ、正直フレームが悲鳴
を上げてるが俺はそのまま相手の空いた右腹に浴びせ蹴りを決めて
その場から離脱するが、相手は両サイドから攻めてきて防御するが
正面がガラ空きになってしまい相手のキックを受けて弾き飛び、膝
をついてしまう。

「これで終わりだ・・・・・・・・ウグオ!?」

「!?!?!?!?!何だ今の光は?」

「……どうだい？これがこっちの喧嘩の仕方」「弾幕ごっこ」「さ」

「無理しちゃだめですかずくん！」

「相変わらずむちゃするね。でもこの土地は私たちの思い出があるんでね、被害が少ないうちに終わらせようよ」

振り返ると3人の人間……いや2人の神様と1人の人間が「弾幕」を撃ちショッカーライダーを倒した。これで戦いは楽になると判断した一刀は立ち上がり、風の力を借りたようにそこに立ちそして風がベルトの風車を回し力を与えてくれ、さっきまで身体を襲っていた痛みを取り除いてくれた。残る敵4体はそのまま走ってくるが、一刀は天高く飛び上がり、中央の敵を捕らえ

「ライダー……キック！」

「ウゴオオ・・・」

―地面には身体を貫かれたシヨツカーライダーは、そのまま活動を停止してその場に倒れむ。残りの3体はすでに弾幕によりベルト部分を破壊され、弱っていた。

そして、一刀はきりもみシュートを使い3体を粉々にして戦いを終え、変身を解き

3人の方に向かって行った

「……ありがとうございました。」

「どういたしまして、向うだと他のライダーがいたと思うけどこっちでは私たちがチームだよ。」

「おっ、さすが恋する乙女！」

「さすが幼馴染！」

「二人とも茶化さないでください！」

「本郷さん、一文字さん、風見さん、ここでのチームが早速出来ました。3人は1人で戦う重圧に気付いてくれたのかは、解りませんが、仲間ができるって嬉しいことですが、同時に辛い事なんですね。」

「さあ、寝ようか」

「奇襲があつたら・・・」

「大丈夫、起こすし、気付くよ」

と笑顔で言ってくれる神奈子さんの言葉に甘え、疲れを取るため睡眠をとることにした。

こうして俺の長い1日が終わると思っていたが、まさか寝室がさなちゃんと相部屋だとは緊張したけど疲れていて、そのまま寝た。けどもなぜか朝起きるとさなちゃんがすぐ横で俺の腹を抱きしめて寝ていたため、動けなかったのはまた別の話

第五話『ライダーキックが効かない？鉄壁の怪人登場』

―あの日以来ショッカーの動きは無く、5日が過ぎていた。あまりにも静かすぎだ。

神奈子さんは天狗や妖怪たちから情報を集めてくれたが、まさか本当に妖怪たちがいるなんて、そういやさなちゃんが言ってたっけ？
「この幻想郷では常識に囚われてはいけない」って、苦労したんだなあ……

「おっ、どうだった？射命丸さん？」

「あやや、気付かれましたか、しかしながらショッカーの情報及び隠れ家は見つかりませんでした。」

「そっか、ありがとうございます。」

「で、取材は受けてくれるんですね、ね！」

「は、はい……（剣幕上げえさすが取材陣……じゃなくて記者さん）」

その後取材を1、2時間答えた、後諏訪子の手伝いとして神社の屋根を直していた。がそこへ、また客人がやってきた。

魔法使い？魔法少女？どっちだこの女の子は？やべえ、さすが幻想郷ぶっちぎるなあ

「よう！あんたが噂の仮面ライダーか？」

「ああ、そうだけど着地するなら地上にしてくれないか？ここ直したばかりだからさ」

「あいよ。」

聞き分けのいい子だ、さなちゃんの昔のころ見たいだな、元気あるし聞き分けいいし

「って思い出にひたらずに、とう！」

すちやと音が立ったがまあ敵はいないんだし気にしない。……
気にしたというか居やがった！

「さなちゃん離れて！！」

「はい？きゃっ！？」

と真上をかすねたのは虹色の光でスパイダーは飛んで行ったがしかし！

「家壊すな！！でもサンキュー！サイクロン！！」

サイクロンはスパイダーをこちらの足元まで弾き飛ばし、一刀はそのまま相手をつかみ神社から離れた所で戦いを始めた。

「お前が来たってことは、他にも怪人が」

「ああ、俺たちは一人一人ではかなわないが2人ならどうだホッパ
ーP1」

「あぶねえ!?!」

「シザーズジャガー外すな」

「次はしとめる」

「いやな組み合わせだな（ジャガーは最後にしたとしても倒せるか？）」

俺の居た世界ではシザーズジャガー相手に本郷さん、一文字さんのタッグで何とか倒せたようなもの、俺一人で今の状況を何とかできるか? いや、何とかするんだ!!

「ハアツ! テエヤア!」

パンチとチョップをスパイダーに当て、ジャガーに蹴りを浴びせていると上空から岩のような塊が降ってきた。

「何だ!?!」

「シザーズジャガー、スパイダー貴様らは、総統が呼んでいる。」

「このダンゴムシが!」

「まてスパイダー一旦引くぞ」

「ああ」

「なんだ? ダンゴムシールド?」

「なんでわかつたし」

「いやゝ明らかに盾付けてるし……」

「まあいいだろう。俺がここで作られた怪人、1番目だ!」

「ぐはっ!？」

何だこいつのタツクル!? 体中のフレームが痛むぜなんてカッコつけてる場合じゃねえ、堅い故に強か! まるでボールのように弾かれ、地面を滑空し、岩に身体が当たる。

「……ツウ、今度は……こっちの番だぜ!、ライダー!! パンチ!!」

「その程度かホッパー1?」

「なっ!?! 確かに決まったはず!」

「貴様のスペックは俺より下だ、時代遅れの失敗作が」

「ライダーキックが通用しない!？」

キックもパンチも効かない相手に一刀は、立ち向かう術を考えながらも敵の攻撃を回避していた。

（あの両手の盾さえなければ……いや、盾があっても行けるけど八雲さんの力が必要だ……どうする? 俺?）

と考えていた矢先、相手はチェーンアレイを出しそれを使って攻撃

してくるのをかわしたと思っていたが鎖が腕に巻き付き、地面に叩きつけられる。がその鎖は切られ、怪人も弾幕を浴びて後退する。

「ふう・・・今は客人のか？」

「客人じゃなくて普通の魔法使い、霧雨魔理沙さ」

「かずくん大丈夫!？」

「何とかな、悪いが八雲さんの力を借りたいから連れてきてくれな
いか？出来るだけ早く」

「人使いの荒い奴だぜ」

「解りました、魔理沙さんよろしくお願いします。」

「えっ、ちょ、もう決定かよ、解ったよちょっと待ってな」

「ああ、何とかする。さなちゃん弾幕で牽制しておいて！」

「でも動ける明らかに仮面取れかかってるけど」

「平気さ、（しかし、まだパワーがうまくまとまらねえ）」

――八雲宅のふすまから漏れてくる声を魔理沙は聞いていた。それは
一刀にかかわることだった。

「なあ、それは本当なのか？」

「ええ、悔しいけど彼を元々は幼馴染に会わせるためだけだったけ

どまさかショックがここに来るなんて、御蔭で彼に寿命を削らせることになるなんて……」

「でも、なんていったけ？リジエクシオン？は起きてないけど」

「彼の場合は、例えるなら蚊が血を吸うようなものよ」

「つまり、気付かないうちに蝕まれてるってこと？」

「ええ、彼の場合すでにチャージが遅くなりつつあるはず」

第六話「奇跡の合体キックで敵を倒せ！」

―あいつ飛び道具まであるのか！やばいあのままだとさなちゃんに当たる、

咄嗟に飛びだし、早苗の盾となった一刀ライダーは身体に銃弾を浴びるがその強化された装甲は簡単に銃弾を通さなかった。

「……………かず……………くん……………」

「平気さ、元の状態でもこれぐらいはね」

とは言っただものの、明らかに赤い液体が流れている。それはまだ弾幕ごっこにしか慣れてない女の子にとっては、恐怖を与えるものですでに足が震え始めている。それを見たライダーは今、自分がどんなことをしているのか解った。

（俺、バカじゃないのか、なんでこんな怖い思いさせる事を平然とやっちゃったんだ。何時もなら追い返したはずなのに。あの日決めたじゃないか、戦うのは俺達4人だけでいいって、なのに俺はまきくんじまったのか！？）

―それは一刀、本郷猛、一文字隼人、風見志郎の4人がショッカーとの最後の決戦の1日前、最終決戦に俺達も連れつてくれとだが本郷は「俺達の戦いにもう人間をまきこみたくないんだ」といい、その後4人で戦いその中で結城丈二と出会い、彼が4番目のライダーとなり一刀は戦線を離脱したそれはもちろん、副作用のためである。

「……………さなちゃんの下がって、もう一人で大丈夫」

「カッコつけちゃって、もう呼ばれたから来たわよ」

「八雲さん！」

「紫さん！」

サイクロンで怪人を弾き飛ばし、紫に一刀は作戦を伝え、その10秒後作戦を実行した。

まず、早苗と神奈子、魔理沙の弾幕で相手の動きを押さえている間に、一刀ライダーが相手に向かって最大エネルギーでのキックを放つために接近しながら紫のスキマにキックの狙いを定めて飛び込み、そのスキマの行き先である相手の腹つまり装甲の無い部分に、

「ぐわああ・・・貴様！」

「わずかな隙間を攻撃しただけだ！さなちゃん行くよ！」

「任せて！」

「奇跡『ミラクルフルーツ』」

「名付けてライダーミラクルシュート!!」

弾幕を身体に纏わせた二人は光の弾となり、相手を貫き相手は光の粒子となって元の改造される前の姿になり、その後医者に念のために見てもらったこととなった。

その後、早苗と一緒に人里に向かうこととなった一刀だが・・・

「あの、さなちゃんちょっと歩きづらい。」

「だって、久しぶりなんだもん」

「つたくなんでこんなに可愛くなったんだ！そして上目使いやめい！あゝあ、神を恨むのはよくないと聞くが今回は神奈子さん、諏訪子さん覚えておいてください！でもかわいいさなちゃん見れたし、いいかな？」

「どうしたの？」

「いや、別になんでもないぞなんでもないからな」

「さあ、お買い物しましょうか」

「そうだな、荷物持ちは任せな」

「そのつもりです。」

「ですよー」

「その後買い物を続ける俺達だったがここの通貨って円じゃないんだ、どうしよう・・・」

「あべし！」

「不意に頭にボール？蹴鞠？が当たり少しよろけるが今の発言は雑魚が死ぬときに履くようなセリフだったよね」

「大丈夫？」

「ああ、平気さ」

「ごめんなさい、ほらチルノちゃんも謝って！」

「あたいは悪くないもん！」

「大丈夫だから頭上げな、今度から気を付ければいいんだからさ」

「って貴方達またいたずら？」

「知り合い？」

「まあそういう感じかな？」

「早苗さんの彼氏ですか？」

「・・・・・・／／／」

「さなちゃん？顔赤いよ」

「ホワアアア！？」

どこの司令官じゃないんだしさそんな声上げない、お兄さんの約束だぞ

まったく、確かによく考えると答えずらいな、如いて言うなら恋人未満友達以上？

「そういう事にしといてくれ、まあ幼馴染なんだけどね」

「今のは告白として受け取っていいよね」

「復活はやっ！って近い近い！」

「いいんですね？」

「ああ、別にいいけどよ買い物途中だろ戻ろっぜ」

今日の教訓、幼馴染だからと言って、告白のチョイ前な事を言わない言うなら2人きりの時にしよう。

「ええ、じゃ失礼しますね」

「ああ、今度は人に当てんじゃねーぞ」

と言に残すと俺たちはまた買い物続けた。が終始嬉しそうな隣の少女を見ると、今までずっと戦ってきたことを忘れてしまいそうな感じがした。

戦い終わったらここに住もうかな？って待てい！今の死亡フラグじゃねーか落ち着け！

俺は死亡フラグを捻じ曲げる男になれ！

「どうしたの難しい顔して？」

「いや、もつといい言葉があつたかもしれない（死亡フラグを避けた言葉のこと）」

「え、ええ！？（告白の事を想像中）」

その後守矢神社に帰宅した彼らは少し挙動不審だったらしいがそれはまた別の話になって

第六話「奇跡の合体キックで敵を倒せ！」（後書き）

スーパーヒーローMAX!!!

「今回の合わせ技決まったね！さすが幼馴染パワー？」

「ああ、さなちゃんがつまく合わせたからかな？」

「ありがとう！でも神奈子様や諏訪子様との合体技は何なんだろう？」

「多分、神奈子さんとだと御柱から放たれた弾幕と共に敵に向かって爆発？」

「諏訪子様とだと地下からドーン！って感じかな？」

「でも紫さんとの合わせ技はある意味チートだよチート」

「デート？」

「おわっ！？いきなりってか人の腹から出てこないでください！」

「いや偶然被っただけよ」

「ならいいんですけどってなんでさなちゃんチャージしてるの!？」

「いえ、なんでもないですよ？」

「なんかこっち来てるけど、次回もお楽しみに！」

第七話「不安と敵の目的」

質問攻め怖い、マジで怖い。

「ねえねえ、早苗に告白でもしたの？」

「い、一体なんのことですか!？」

「いやゝ酒飲んだ早苗からのカミングアウト」

「下戸の人に何してんですか!？」

「いや、自滅だったんだよ。水と間違えて私の酒を飲んじまって」

「うああー」

「それって遊園地の人？」

「いや、国際のなんか」

「御二人さん、その組織は違うところで頑張ってると思います。」

「所でさあ、変身ポーズとか無いの？」

「え？そうですね。再度改造手術した時に頼みます。」

「ならいい医者と」

「いい技術者がいるよ」

がしつと肩を2大神様に掴まれ身動きが取れない一刀は恐る恐る尋ねた

「その人達つて改造手術できます？」

「おや？乗る気だね、どうしたんだい？」

「……さなちゃんたちの力を借りずに戦いたい、でも今のままじゃ、力も雑魚と同等いやそれ以下かも知れない。だから少しでも強くなつて皆を速く笑顔にさせたい。そして、ここで笑顔の皆と平和に過ごしたいんです。」

「そうかい、解つたよ。」

意外とすんなりだったと思いきや

「明日の朝は赤飯だね」

「そうだね、今軽くここで暮らすつて言つたからね」

「うああ、やつちまつた。」

と自分で言つたことを思い出し恥ずかしくなり顔を赤くしたすぐ後だ、本当に10秒程度

後ろから柔らかい感触と衝撃が身体を伝わり振り向くと完全にできあがつた。早苗が背中に抱きついていた。

「かずくん、結婚してくだしゃい！」

「け、結婚！？は、話が飛びすぎ！！」

「えへへへ」

「くすぐったいって神奈子さん、さなちゃんを部屋まで連れていきますんでよろしく」

「えっ食べるの？」

「いやいや、なんでそうなるの！」

「いや年頃の二人ですし」

「ねえ」

「勝てるきしねー」

「「何せ神ですから」」

「「ごもつともです。」」

とその後にはきちんと自室で寝たけども、その技術者と医者に会いたくなくなった。

そうすればこの痛みも楽になると思う。

そう右手を見ながら一刀は思った。すでにリジェクションでの吐血のような感覚は、本当になりつつある。もしも吐血や激痛が戦闘中に起こったら、と考えると不安でしやうがない。明日、会いに行くことにしよう。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「首領閣下、改造人間たちをどうするおつもりで？」

「いつその事すべてを混ぜ合わせ、最強の怪人を作りその怪人一体でこの地を征服してやるのだ」

「聞いたかシザーズジャガー、スパイダー、コブラ、スネークその装置に入れ・・・グフツ！？なぜですか首領！？」

「こやつらは脳が足りんのでな貴様のその悪知恵の働く脳みそが必要なのだよ・・・シヨツカー研究員たちよ早くしろ！」

「イー」

とその5体の死体を装置の中に入れ、一度は溶かし、もう一度型に入れ機械のボディを得た怪物を作り出した。その身体は蛇のようになやかに動き、その腕は岩をチーズの様に切り裂く刃が禍々しく光り、まるでクモのような俊敏さを兼ねそろえた怪人となった。

「・・・・・・・・・・さあホッパーP1いや仮面ライダーよ、こいつに無残に殺されるがいい！」

高く夜を照らす光に向かって叫ぶ首領はその真の姿を現した。

「幻想郷は貰った！」

それは壊滅状態のシヨツカーを大組織として復活させるための計画の第一歩の始まりだった。

第七話「不安と敵の目的」（後書き）

スーパーヒーロータイム!!

「なんか！パワーアップフラグだね！」

「おわあ！？隣で大声出さない！さなちゃん！」

「ごめんなさい、でもかずにロケットブースターやバルカンが
装備されるのかな？」

「はい？それはロボットですよ、一応俺人間だよ？」

「そうだよ早苗諦めらな」

「……はい、でも非想天則に取り付けばいいんですね！神奈
子様！」

「うわあ！早いなあ！さなちゃん」

「まっ次回もお楽しみにな！ブラウン管の前の諸君」

「すいませんがモニターの前ですよ……」

「神祭『エクспанデッド・オンバシラ』！」

「ギャアー！？」

第八話「合成怪人と再改造」

次の日の朝早く、俺とさなちゃんはその永遠亭という場所目指して移動していた。

だが俺は地面を蹴り木々を蹴りさなちゃんの飛行スピードに合わせていた。

「っと、なあこのままでいいのか？」

「一応、私は場所わかってるもん」

「了解」

いくら改造人間とはいえ、竹を蹴って移動するのはなれないというか竹がしなってパワーが発揮できない。

そう思っていた矢先だった。何かの気配を感じ振り返ると元の生物が解らないほど混ぜ合わさった怪物がそこにいた。咄嗟に幼馴染にこの事を報告しようとしたが、そのままタックルを喰らい地面に叩きつけられ、ボールのように跳ねて地にめり込む

「なんだ？こいつのパワーは！」

「・・・・・・・・・・」

「うち改造のやり過ぎで、喋らなくなっただか！」

「・・・・・・・・・・」

「まじかよ……」

相手の尻尾が一刀の脇腹に当たり竹を折りながら地面に叩きつけられてしまう。

そのパワーは今まで相手にしてきたものよりも上回っていた、いや比べ物にならないほどだった。

「……変身しといて助かったかな？」

変身した御蔭でダメージは軽減できたが、仮面は罅割れ、ボディにも罅が入りこれ以上のダメージは、命にかかわってくる。

「……こんなに身体に響くのかよ」

ライダーの姿で相手に殴りかかるが、相手はいとも簡単に回避し反撃を加えると赤い鮮血が流れ出し、緑の竹を赤く塗る。

「ぐふっ!？」

「……」

「……恐ろしい者作ってくれたね。」

右わき腹からまだ紅く血が流れ続けていた、その血液は改造人間用の血液で、この地では決して手に入らないもの、普段なら止血システムが発動するが相手はこちらの設計図を記憶したのだろう。止血システムある場所を正確に攻撃してきたのだから間違いない。

「……一気に行かせてもらっぜ!」

早苗が近くにいないことを確認するときりもみシュートを決め、相手を空中に上げ、身動きを封じたと思っていたら背中の中翼で空中から見下していた。

「……羽あるのかよ……全体的に不利に変わりないか……うつ！？」

やばい、リジエクシヨンが起きた、しかも激しい方のものだった、ただでさえ状況が悪いのにこんなので、死神にまでもかよ！人気者は辛いな……

「……つぶ、そんなこと言ってるんじゃないね」

というと重い身体をあげて、空に浮かぶ敵を確認し、ライダーキックを放つが相手の腕が鋭い刃物に変わり腹を斬り裂かれ、仮面が宙を舞い素顔を出してしまうライダー

「うっお……技が潰される。」

が相手の右目を引き抜いたライダーは痛みを苦しむ怪人の収縮自在な尻尾に捕まり地面を引き摺られ、肩のプロテクターが削り落される。その後立ち上がるが、身体はすでにリジエクシヨンで蝕まれ、身体は、所々肉と配線が見えており、赤黒く流れる血液は、その白いベルトを汚す。

「蛇符『神代大蛇』！」

神の化身の蛇の如くその弾幕は相手を襲い退散させることに成功したが、元々の聞く席されたダメージが限界を達していたのだろう。まだ余裕を見せながらの退散だった。

「かずく・・・」

「大丈夫だそれより悪いけど多分河童さんたちの力も必要になるから連れてきてくれるか？」

「わ、わかった」

「さあて、もういつちょ本気出すか！」

もう本気などなく、限界寸前の彼は、ただ気合いで乗り越えようとしていた、それが機械の身体を破壊することと知っていても。

「おりゃあああー!!」

「・・・・・・・・グウ!？」

「てめえの相手はこの俺、仮面ライダー旧1号だ!! あいつには攻撃させねえ！」

と叫ぶ一刀はそのぼろぼろの身体で相手と戦うために歩きだし相手の背中に飛び乗り羽を?ぐ、あまりの激痛に苦しむ怪人とその返り血を浴びて、顔を赤黒く染め、その瞳にはアイコンや、メーターが映し出される。それは彼にとって初めての経験、そのアイコンは自分のダメージが映し出されるもの、メーターは残りの活動時間というより、リミッターの制限時間だその時間中はすべてのスペックを何倍にもすることができるとは、その時間を過ぎるとリジエクシヨン以上の反動が襲う。諸刃の剣だ。

「まだまだ!・・・（あと1分半か!）」

「……………貴様は、もうバーサークシステムを使ったのか？」

「この声は！」

「さあ殺れ！キメラ！」

「……………グワアアアア！！！」

「うわっ！？」

怪物は地面をはいながら尻尾でライダーを弾き貫かれ、そして地面にまた叩きつけられる。

そして活動時間が終わり激しく苦しみだす。
だが相手の動きが止まりかける。

「うごはあ！？……………動きが止まった？」

「……………まったく、五月蠅くて診察もろくに出来やしないわ、それにまったく怪我人までいるの？」

「……………貴女が八意 永琳さんですか？」

そこには蒼と赤のツートンカラーをした銀色の髪をした女性が弓矢を持って立っていた。

そしてその女性はゆっくり落ち着いた様子で答えた

「ええ、貴女の事は神奈子から聞いてるわ……………立てる？」

「はい、立てます。」

と言うが少しよろけるも肩に何かを支えてくれるのを感じた。

「さなちゃん？」

「もう無理し過ぎ」

「ああ、すみませんが診察お願いします。」

「はあ、一応予約があつたけどこんなにぼろぼろだとはね」

「はっはっ、すみません」

その後一刀は生体ポットの様な物に入り、河童および薬師による再改造並びに肉体再生をもらうこととなったが

「うわおー、すごい構造だけど意外と無理やり入れてる感じだね。
ならここをこうしてと」

「あゝさっきから何してるんですか？にとりさん？」

早苗は蒼い髪のツインテールの女子に話しかける。その女性が幻想郷のエンジニアとしても名高い、『河城にとり』だ

「うん？配線の修正と無駄を省いてるとこだよ」

設計図らしきものを見ているがはつきり言つと解らないものだ、だがERRORと表示されている部分を修復してるのだけは解つたそのすぐ後、『ERROR』の表示は消えCOMPLETEという表示に変わった。

「おお、これで彼の身体の修理と改修は終わったよ」

「これでリジエクシヨンは起きないんですね！」

「そうだよ。よかったね彼氏さんが無事で」

「か、彼氏ってそんな？」

「とりあえず次は私の番ね」

「あとは頼むよ、先生」

「まかせなさい、って言ってもこの薬の投与で終わりだけどね」

という薬の入った無針型の薬を注射し、彼は目覚めた

「いたあゴボゴボゴボオ！」

生体ポットとはいえ中身は液体、そりゃ、溺れるよ……
こんなこともあったが、カラーリングも少し変った力の戦士が復活し、再度合成怪人との戦いに臨むのであった。

第八話「合成怪人と再改造」(後書き)

スーパーヒーロータイム

一刀「今回は俺の復活祭だぜ！」

早苗「スイッチ着く？」

一刀「それは今のライダーでしょ？」

神奈子「あれ？カードの奴は？」

諏訪子「カードじゃなくてメモリだよ」

一刀&早苗「それ2、3個前です……」

諏訪子&神奈子「「な、なんだって〜！」」

一刀「そろそろ時間か〜質問やコラボしたいですって方は気軽に感想、およびメッセーじでお知らせください。では」

早苗「次回をお楽しみに！」

第九話「再戦、合成怪人VS新ライダー」

いつもの仮面とは少し色が違い少し明るくなり、ベルトは汚れのない純白の色でマフラーもいつもと同じで赤いが身体の色が少し明るくなっている。これが仮面ライダー旧1号ではなく1号のようなカラーリングになっている。

「かずくん、大丈夫？」

「ああ、大丈夫さ悪いけどさなちゃんはここで防衛に専念してくれ
ると嬉しいな」

「了解！」

なぜか嬉しそうに答える早苗をその場に残し一刀は、仮面を被りそのままさっきの怪人を倒すべくバイクに跨りそのまま向かう。そのバイクはいつもよりまして元気良くなったモンスターマシンである。相手は封印を解き暴れ始めようとしていたのをバイクで攻撃する

「サイクロンアタック!!」

「……………グラッ!？」

「今度はこっちが凹ス番だぜ！」

と言うとバイクから飛び降りそのままライダー岩砕パンチを加え、相手の堅い腕の鉄を砕き、そのまま突進を加える。

「はあああああ!!」

相手の腹に蹴りを加えながらのサマーソルトで相手の強化外装は徐々ににはがれ、肉体が姿を現す。その部分に攻撃を加え始める。

「はああああ！」

「……ライダー……スケテ・レ」

「何だと！」

「……仮面ライダー俺達を……助けてくれ」

「……解ったが俺は魂しか救えねないぞ！それでもいいか？」

「………」

相手は静かに首を縦に振った。キメラの元になった人達の人格が奇跡的に復活し、その体に乗っ取り動きを止めていた。

「とうつ！！ライダー……キック！」

高く飛び上がった戦士のキックはその悲しい怪物を光に変え、天に昇らせることに成功したが、その心には首領に対する恨みが募っていた。

「あの野郎、今度こそ絶対倒してやる！復活させないほどに！」

と空に向かって叫ぶライダーは変身を解きさらに空に向かって指をさし

「首領聞いているのなら！今度こそ俺がお前を！倒す！復活できないほどになー！」

と言いつつその場から立ち去り、その場には一輪の花が添えてあった。

「おゝさすがに、性能が強化されてるよね」

「はい！その面は大丈夫です」

なんでお前がいつてんだよしかも（>ワ<）bって感じの顔しちゃつてさあ、

昔からロボットとか好きだったのは覚えてるよ、でもそこまでテンションあがるか？

「確かに色も変わってるね！前より明るいし」

「ありがとうございます。」

「さあてご飯にでもするか」

「そうですね手伝います！」

「じゃ魚を手刀でさばいて」

「そこで使っんですか？いきなり？」

「駄目ですよ、粉々になります」

「ええゝそこまで強力じゃないし」

「ってか二人揃って寝ちやいねよ」

「だから！なんでそうなるの！」

最近の落ちはこれかかれこれ2回目の様な気がしてきた。がまあとりあえずバイクともども再改造され、新たな力を手に入れたライダーだった。

「ねえこの技の事は言わなくてよかったの？」

「・・・ライダー電光火柱キックね、確かにこれは最後の技だけどこれは最初から有ったからあの子も知ってるはずよ。」

そのモニターには、RIDER DENKOU HIBASHI
RA KICKと書かれていたが
補足するように永林は続けた

「この技は全エネルギーを使うまるで死ぬだけの技の様に」

「多分彼は最後の戦いに使うはず。」

「まあ可能性でしょ？」

第九話「再戦、合成怪人VS新ライダー」(後書き)

スーパーヒーローロータイム!!

早苗「ねえねえライダー電光火柱キックってどんなの?」

一刀「とりあえず利き足が炎上しながら電気を纏ってきりもみキックを放つ技」

早苗「そこに弾幕を加えると・・・弾幕ライダー電光火柱キックになるわけですね」

一刀「名前、長すぎる!」

次回をお楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5414x/>

仮面ライダー 幻想郷～原点の風が幻想入り

2011年11月20日00時02分発行